防災の
デザイン

何故、私は災害支援を建築家として始めたのか？

建築家　坂　茂

1984年にCooper Unionを卒業し、まったく実務経験もないのに東京でプラクティスを始めた。最初は実務を覚えるのに必死であったが、10年位して少しずつ周りが見えるようになってくると、「なんだ、我々建築家はあまり社会の役に立っていない。」ということに気づいた。歴史的に見てもそうだが、我々建築家は、主に特権階級の人達のために働いてきた。特権階級、例えば、政治家やお金持ちの人達、政治力も財力も目には見えないので、彼らは我々建築家を雇いモニュメンタルな建築を建て、自分の力を一般社会に示す。

そういう仕事を我々建築家はしている。私もモニュメンタルな建築を作ることに興味がないわけではないが、もう少し自分の建築家としての経験や知識を一般の人々のために使えないか、そして災害で家を失った人達の家を作れないか、と考えた。特に大きな地震があった後に気が付いた。地震自体で人は死ぬのではなく、建物が崩れて人が死ぬのだ。つまりそれは我々建築家の責任なのだ。ところが街が地震で崩壊した後、街を再建するため、我々建築家のもとにたくさん新しい仕事がくるのだ。しかし街が再建される前に被災者達は、避難所や仮設住宅というとても住環境の悪い空間で何ヶ月も耐えなければならない。そこで、その避難所や仮設住宅を改善するのも我々建築家の責任ではないかと考え始めた。

そんな頃、1994年ルワンダでフツ族とツチ族の間で虐殺が起こり、200万人もの難民が近隣諸国に押し寄せた。その様子の映像を見た時、国連が設営した難民キャンプのシェルターがあまりに貧弱で、雨期には寒くて人々は毛布に包まっている状況に驚いた。そこで国連難民高等官事務所（UNHCR）の日本支部で、ジュネーブ本部の担当部署を聞き、シェルター改善の提案の手紙を出した。しかし何の返信もなく、仕方なくアポなしで直接ジュネーブの本部を訪ねた。運良く、難民キャンプ設営の担当のウルフギャング・ノイマンというドイツ人建築家と会うことができ、私たちの開発した再生紙の紙管を使ったシェルターの提案を見せた。すると彼は私の提案に大きな興味を持ち、私をコンサルタントとして雇い紙管のシェルターの開発をしたいという話になった。その時彼がかかえていた難民キャンプの問題は、環境問題であった。当時のルワンダ難民シェルターは、難民達が現地の木を切りシェルターのフレームを作り、その上にUNHCRが提供するプラスチックシートを掛けるというものであった。しかし200万人もの難民達が木を切り、大きな森林伐採となり深刻な環境問題に発展した。そこでUNHCRは森林伐採を止めるため、アルミパイプを支給した。ところがアルミは現地で非常に高価な材料で、難民がお金

ルワンダ難民キャンプの紙のシェルター（1999）
提供：坂茂建築設計